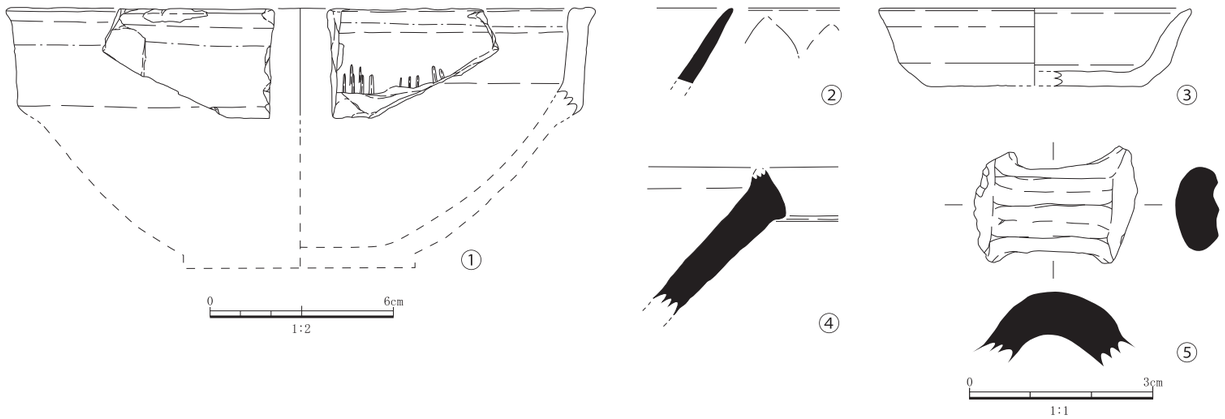
熊本城解体新書 その6

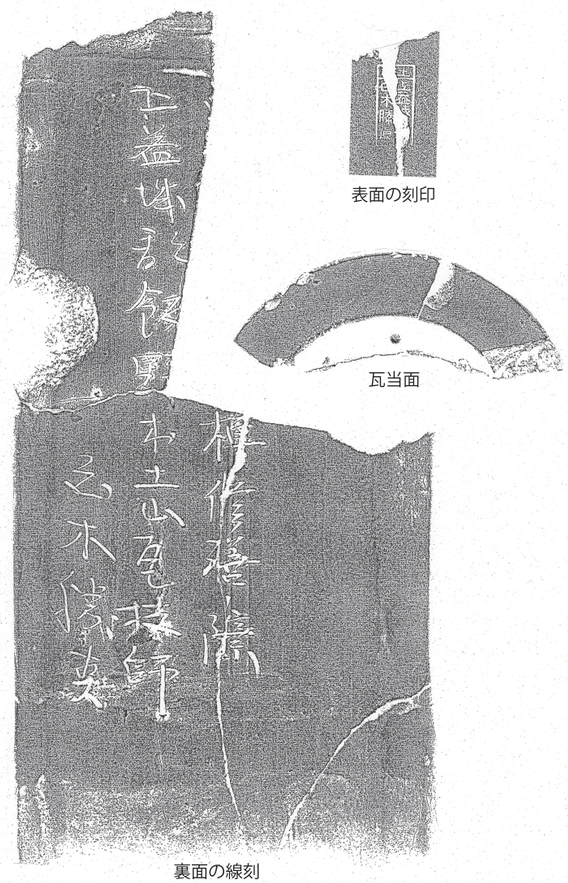
国指定重要文化財復旧に伴う調査成果
平左衛門丸 編

◆加藤期以前の熊本城

第３トレンチ拡張部の14層からは、中国産擂鉢(①)、無鎬連弁の施された青磁碗(②)、土師皿(③)、須恵器こね鉢(④)、四耳壺(⑤)、鉄滓等がとても摩滅を受けた破片として出土しています。これらの出土遺物の中で最も新しいものが15世紀前半であるため、この14層は中世後期に造成されたことが伺えます。熊本城築城以前のこの一帯には茶臼山廃寺とよばれる寺院が存在していたといわれていますが、遺物の内容も寺院で使われたと考えてもおかしくないものばかりです。



第３トレンチ拡張部 14 層出土遺物実測図（①～④:S=1/2・⑤:S=1/1）



線刻補修丸瓦拓本

◆熊本城を支えた名工

現代の埋土から一点の軒丸瓦が出土しました。表面に「土山 ｜ 上益城□□白木勝眞」の刻印を、裏面に「□□櫓修繕ノ際　上益城郡飯野本土山瓦技師　白木勝眞」の線刻があります。瓦当面は桔梗紋と推定され、宇土櫓か続櫓を補修した際に廃棄された瓦と考えられます。文字の内容が類似した瓦は平櫓の修理工事の際に発見されており、白木氏の名前とともに「昭和2年」の年号も確認できます。「土山」は益城町にある瓦産地で、瓦師の福田家や猿渡家、北村家の先祖附によれば加藤清正の入国に伴い小山(熊本市東区)で瓦を生産し、その後土山に移住したとされます。土山で瓦生産が始まった時期は過去帳や藩の御用瓦師に関する記事から18世紀初頭と考えられ、藩主が細川に代わっても瓦を生産し続けました。白木氏の名前は大正14年11月28日「飯野瓦業組合設置許可申請書」に確認でき、大正～昭和初頭に活躍した瓦師のようです。昭和2年以降は熊本城内の修繕に土山瓦が使用された記録がないことから、この瓦をもって約300年間続いた熊本城への土山瓦の供給は終焉を迎えたものと考えられます。

特別史跡 熊本城跡

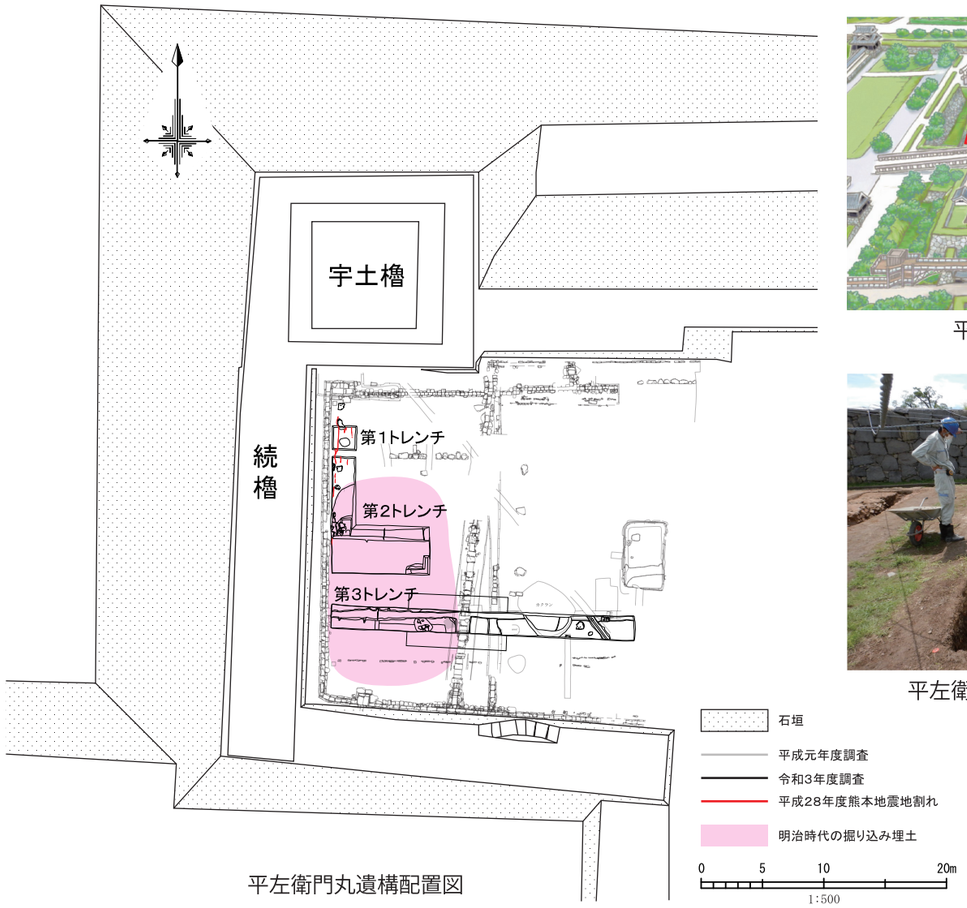
所　在　地：熊本市中央区本丸 外
指　定　日：昭和 8 年（1933）2 月 28 日 史蹟指定
　　昭和 30 年（1955）12 月 29 日 特別史跡指定
　　令和 元 年（2019）10 月 16 日 最新追加指定
指 定 面 積：約 57.8ha（旧城域面積：約 98ha）
指定地内 国重要文化財建造物：13 棟（櫓 11 棟、門 1 棟、塀 1 棟）
石 垣 面 数：973 面（平成 28 年現在）
石 垣 立 面：79033.12 ㎡（平成 28 年現在）
石垣時期区分：7 期に大別 + 文化財修復石垣

（熊本市 2020「第 7 章付論 第 1 節 熊本城の石垣変遷」
『特別史跡熊本城跡総括報告書 調査研究編』第 2 分冊）
※熊本市（熊本城調査研究センター）HP に
報告書ダウンロード可能リンク先あり

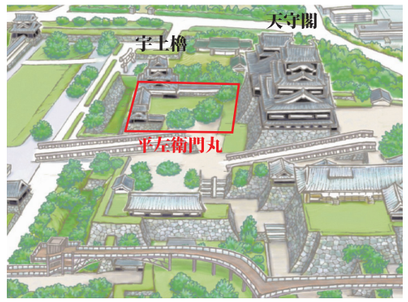
平左衛門丸全景（南西から）

◆平左衛門丸の発掘調査

平左衛門丸は天守の西側に位置する曲輪で、北西隅には現存する唯一の五階櫓である重要文化財宇土櫓があります。宇土櫓続櫓下石垣の修理設計に必要な情報を得るために、令和３年度(2021年度)に発掘調査を実施しました。平左衛門丸では、平成元年度(1989年度)の宇土櫓修理に伴い全面的な遺構の確認が行われており、６本の排水溝や礎石建物跡等が確認されていました。これらの調査成果と事前に実施した地中レーダー探査の成果を踏まえて、今回３か所の調査区(トレンチ)を設定しました。



平左衛門丸遺構配置図



平左衛門丸位置図

平左衛門丸発掘調査の様子

熊本城解体新書 その６　国指定重要文化財復旧に伴う調査成果　平左衛門丸 編
熊本市文化市民局 熊本城総合事務所 熊本城調査研究センター 096-355-2327　令和５年（2023 年）４月 第１版 第１刷発行

◆発掘調査で明らかになった熊本地震の痕跡

地表面で確認できる熊本地震の影響

宇土櫓前では、平成 28 年熊本地震後に南北に延びる地割れが確認されていました。この地割れの地下への影響を調べるため第 1 トレンチを設定し、約 50cm 掘り下げました。地割れは地下深くまで及んでおり、直線的にではなく西側の石垣に向かってやや弧を描きながら延びていることが分かりました。今後の石垣解体時に予定している調査によって、石垣と地割れの関係が明らかになることが期待されます。

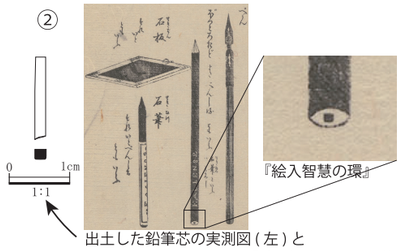
第 1 トレンチ北壁の地割れ痕跡（赤線地割れ位置）

◆明治時代に行なわれた平左衛門丸の改変

今回の調査の結果、平左衛門丸西側に大きな掘り込みがあり、明治時代に埋め戻されていたことが明らかになりました。埋め戻した土からは、幕末に熊本城下で流通していた薬盒（やくごう）の蓋（ふた）（①）や明治時代に使用され始める鉛筆の芯（②）、明治陸軍が使用したと思われる靴墨（くつずみ）の缶（③）等が出土しました。また、最下層からは石垣の石材（築石（つきいし））がまとまって発見されました。この掘り込みがいつ掘られたか明らかではありませんが、出土した遺物の年代や、明治 22 年の金峰山地震で平左衛門丸周辺も石垣に被害が出ていることから、この時に瓦礫（がれき）を埋めた可能性が考えられます。

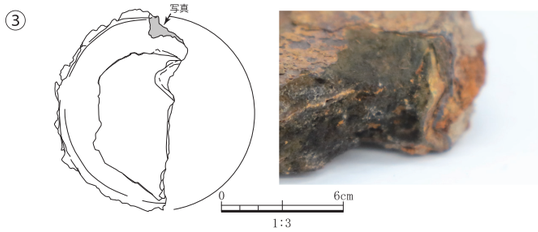
第 2 トレンチ東壁土層（白枠内が明治時代の掘り込み埋土）

第 2 トレンチ築石集石状況



出土した鉛筆芯の実測図（左）と
『絵入知恵の環』記載の鉛筆

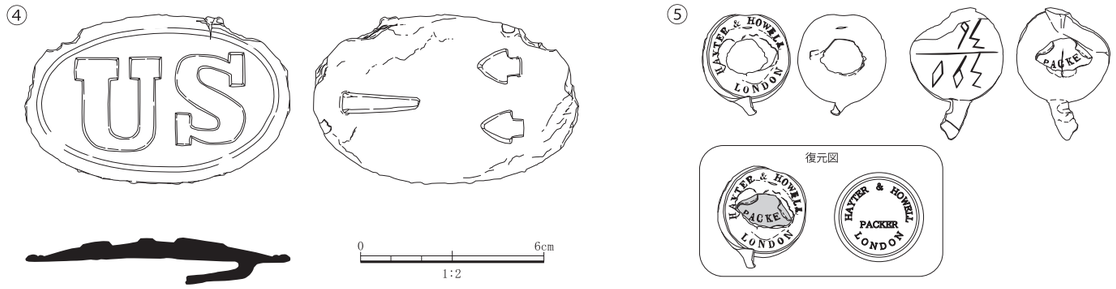
断面が四角形である点に注目です！
現在の鉛筆の芯は丸ですが、明治時代の教科書である『絵入智慧の環』では四角で記載されています。



出土した靴墨缶の実測図と靴墨部分の拡大写真（黒色が靴墨）

靴墨は、明治時代に軍隊で革靴が用いられたことから普及しました。陸軍では明治 11 年から靴墨が使用され始めた記録が残っているため、この缶の出土によって、この掘り込みが埋められたのは明治 11 年以降であることがわかります。

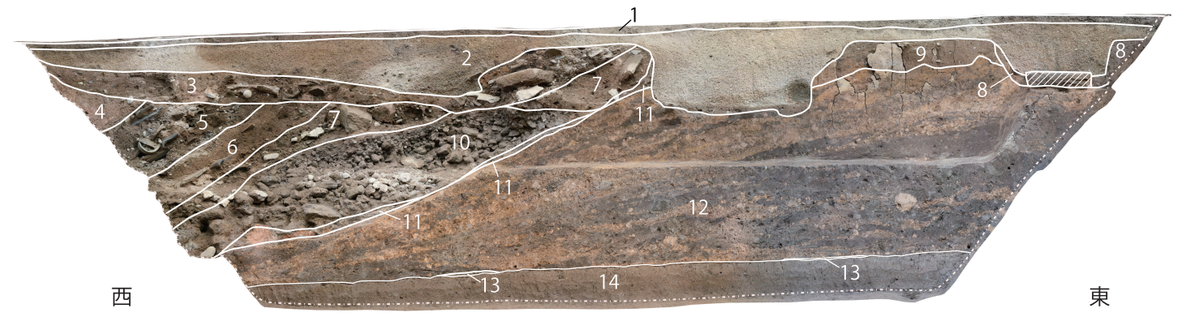
平左衛門丸掘り込み埋土内出土遺物 1



平左衛門丸掘り込み埋土内出土遺物 2

また、明治時代の埋め戻し土からは、明治 10 年（1877）の西南戦争に関連すると考えられる遺物が出土しました。上図の④は「US」銘のある金属製バックルです。このバックルは米国の南北戦争（1861 ～ 65）時に北軍の軍服として使用されたもので、「US」は「アメリカ合衆国（United States）」を表しています。⑤はメダル状の金属製品です。形状から荷札と考えられ、「HAYTER & HOWELL LONDON PACKER」「390/36」の銘が読み取れます。1843 年のロンドンの住所録である「The Post Office London Directory 1843」には、ヘイター＆ハウエルの住所が記載され、職業として「Army packers」とあります。イギリスの公文書を調べると、ヘイター＆ハウエルはクリミア戦争（1853 ～ 56）でも物資の調達を行い、南北戦争でも活躍をしたようです。南北戦争が終結すると両軍が使用した大量の武器類は民間業者に払い下げられ、その後海外へ売買されることになります。日本でも戊辰（ぼしん）戦争の際にエンフィールド銃が輸入されたことが知られており、今回の発見は、明治政府が武器に限らず装備品についても南北戦争で使用されていた物資を輸入していた事実を示す、貴重な例です。

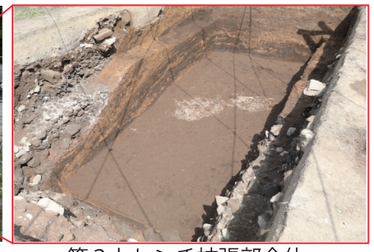
◆加藤期の曲輪造成



第 3 トレンチ拡張部北壁

1 表土 ―― 現代
2 平成元年度調査埋土 ―― 平成元年度
3 灰黄褐色土（10YR4/2） ―― 昭和時代か
4 赤灰色土（2.5YR4/1）
5 暗褐色土（7.5YR3/4）
6 にぶい黄褐色土（10YR4/3）
7 灰黄褐色土（10YR4/2）
―― 明治時代（M11年以降）
8 にぶい黄褐色土（10YR4/3）
9 オリーブ褐色土（2.5YR4/3）
―― 江戸時代（細川期）か
10 暗オリーブ灰色土（5GY4/1）
11 灰オリーブ色土（5Y4/2）
12 褐色土（7.5YR3/4）・黒褐色土（10YR2/3）
13 にぶい褐色土（7.5YR5/3）
―― 江戸時代（加藤期）か
14 暗オリーブ褐色土（2.5YR3/3） ―― 中世後期

第 3 トレンチ拡張部位置



第 3 トレンチ拡張部全体

第 3 トレンチの拡張部では、加藤期と考えられる盛土を検出しました。上図の 10 ～ 12 層がそれにあたり、10 層は阿蘇火砕流堆積物（Aso-4）である凝灰岩礫（ぎょうかいがんれき）の盛土、12 層は褐色土と黒褐色土を交互に突き固めた版築層（はんちくそう）です。これらの層はいずれも西側に向かって傾斜しており、石垣の背面構造としてこのような盛土が行われた可能性が考えられます。

熊本城跡は文化財保護法で国の特別史跡（建造物・美術工芸品などの文化財指定「国宝」と同じ意味）に指定されています。
先人が築いた状態のままを後世に伝えることを目的に指定されているため、現状保存が原則となります。しかし、遺跡（熊本城跡）を現状のままで後世に伝えることが難しい場合などは、きちんとした調査を実施した上で修理が行われます。
上下が黒帯の本パンフレットは、唯一無二の歴史的証拠をやむを得ず解体した際の調査成果を、より多くの皆さんに手軽にお伝えし、特別史跡熊本城跡としての価値をさらに高めることを目的としたものです。